

# NARA CODE

奈良に宿る知恵を編む

Unearthing the Cultural Fragments of Nara



NARA CITY

奈良市

Old History,  
New Discovery.

## 奈良に宿る知恵を編む

科学技術の著しい進化によって、人々の生活は日に日に便利になり、必要なものはすぐに手に入る豊かな時代になりました。第二次世界大戦後、地球上では人口増加や産業のグローバル化などが一気に進み、「大加速（The Great Acceleration）」と呼ばれる経済発展の時期を迎えました。

しかし、人類活動の急速な高まりは、豊かさと同時にさまざまな問題を引き起こしています。地球温暖化による気候変動、自然環境の破壊、化石燃料への依存、飢餓や貧困、各地で起こる紛争や戦争――。

経済成長や技術進歩を重要視してきた時代から、多文化の調和や自然との共生を重んじるあり方へと、姿勢の転換が求められています。科学技術の進歩を称揚してきた万国博覧会でさえも、2025年大阪・関西万博では「いのち」をテーマに掲げました。

経済発展のために地球資源を使い果たすのではなく、だからといって環境保護のために人類の生活を軽視するのでもなく、人類と地球とが共存していくにはどうしたらよいのでしょうか。異なる文化や考え方もつ人々が尊重し合いながら共生していくには、どのような知恵が必要なのでしょう。

### 日本に息づく、未来社会への知恵

自然と人間の関係は、場所や時代によって、そのあり方を変えてきました。古代ギリシア以来、西洋では、自然を人間とは異なる対象として捉え、理性によって理解しようとする考え方が培われてきました。こうした姿勢が自然科学の発展を支えてきたといえます。

一方、東洋では、人間を自然の一部とみなす思想が育まれてきました。とりわけ天災の多い日本では、山や木々、岩、川、風や雷に至るまで、森羅万象に神霊――いわゆる「<sup>やおよろず</sup>八百万の神<sup>かみ</sup>」が宿ると考えられ、人智を超えた存在として畏れ敬われてきました。

また、日本列島はユーラシア大陸の東端に位置し、奈良時代には「シルクロードの終着点」と呼ばれるほど、多様な文化が伝わってきました。そして、その外来文化をそのまま受け入れるのではなく、例えば中国から伝わった漢字からひらがなを生み出すなど、独自の編集を加えて自国の文化を耕してきました。多様性を包摂し文化を生み出す土壌が、日本には根付いています。

聖徳太子は「和を以て貴しと為す」と説きました。ここでいう「和」とは、人と人との調和だけでなく、神仏、人間、自然の重なりに折り合いをつけることでもあります。古代から日本では、異なるものを受け入れ、共生していくことが重視され、実践されてきたのです。

いま世界では地球と人間の共生に向けて、いよいよ価値観の転換が求められています。これからの未来を築くためのヒントは、日本の古層に息づいているのかもしれない。

### 「Old History, New Discovery.」を旗印に

奈良は、日本文化の源流ともいえる土地です。平城京の時代、大陸から多くの異文化が流れ込み、万葉集に象徴されるような自然を愛でる感性が一挙に花開き、奈良は「和」の中心となりました。「日本」という国号が公式に用いられるようになったのもこの時代です。奈良が育んできた1300年の歴史には、日本独自の価値観や精神性、文化、そして叡智が刻み込まれています。

奈良市では、2023年から「Old History, New Discovery.」というスローガンを掲げています。「温故知新：故きを温ね、新しきを知る」という論語の一節に象徴される精神を英語で表現したものです。過去を深く学んでこそ、未来に活かすべき発見があります。このスローガンは地元中学生から市在住の外国人の方まで、多様な立場の人々との対話によって生まれました。

この冊子「NARA CODE」は、奈良が培った歴史・文化・暮らしを掘り返し、これからの社会に生かすための小さな手引きです。価値観が変わりつつあるいま、あらためて考えたい問いと、そのヒントになりうる「奈良に宿る知恵」を6つ取り上げました。読者のみなさん一人ひとりが、知恵の断片（コード）を解読し、未来をひらく鍵を手にしていただくことを願っています。

02 まえがき

## 複雑系社会を生きる

05 **Q.1** リスクとともに生きる知恵？

**NARACODE 1** 和する・荒ぶる

09 **Q.2** フィルターバブルの外に出るには？

**NARACODE 2** おとづれ

## 調和・共存への鍵

13 **Q.3** 排除でも同化でもない共生のかたち？

**NARACODE 3** ないませ

17 **Q.4** 大地と人間の「いい関係」？

**NARACODE 4** あをによし

## 文化を耕し続ける

21 **Q.5** 伝統と創造は両立できる？

**NARACODE 5** 守破離

25 **Q.6** 日本流の「想像力」とは？

**NARACODE 6** おもかげ

29 収録図版 所蔵・提供元一覧

30 Old History, New Discovery. ノート

Q.1

## リスクとともに生きる知恵？



現代社会は安心・安全を求めて、できるかぎりリスクを排除しようとする。不測の事態を避けたいのは当然のこと。しかし、リスクをコントロールできると考えるのは、世界を明確な因果関係によって把握する現代的な感覚でもあります。

世界は、本来きわめて複雑で、予想外の出来事は常に起こり得ます。複雑な社会をし

なやかに生き抜くにはどうしたらよいのでしょうか。

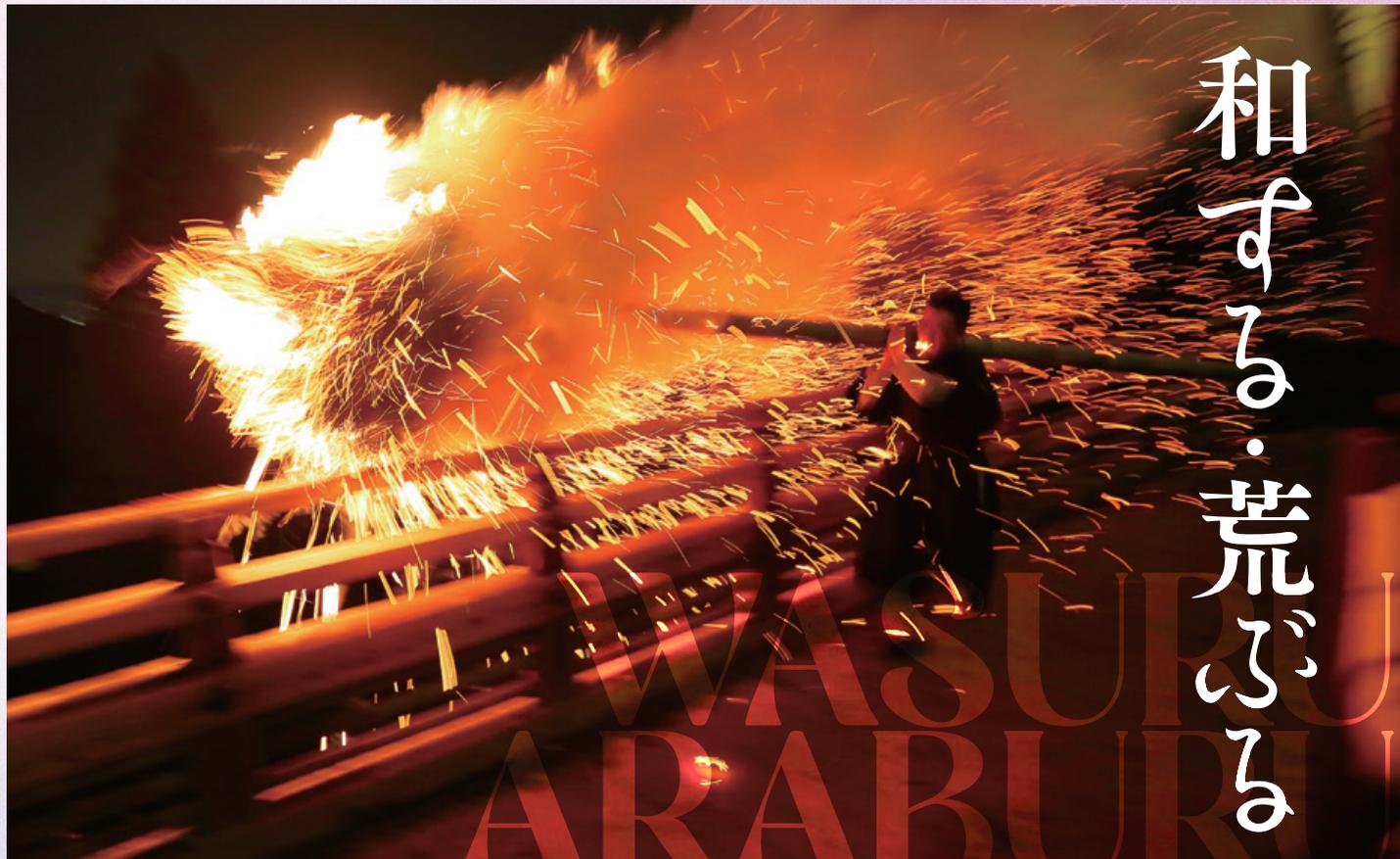
未知なるものや危険なものとは争わず、排除するのではなく、多様な存在を受け入れて折り合いをつける——。現代にもヒントになりそうな「和する」という知恵は、どうやら飛鳥から奈良にかけての日本で育まれたようです。

## 「荒ぶるもの」を取り込み 「和」となす

日本は「和」の文化です。「和を以て貴しと為す」の言葉に象徴されるように、争わないことや調和を保つことが重視されてきました。その背景には、7世紀の国際情勢があります。大唐帝国の成立と新羅の朝鮮統一により、日本は大陸からの脅威にさらされました。そのなかで選んだのは、武力対立ではなく、衝突を避けながら関係を維持する道です。荒ぶる力がぶつかるリスクを回避し、共存を図る知恵が「和する」だったのです。

「大和国」と呼ばれる奈良には、その姿勢が色濃く残ります。節分<sup>しゅんぶん</sup>のとき、金峯山寺（吉野町）では「福は内、鬼も内」と唱え、全国から追われた鬼を迎え入れます。これは、修験道の開祖とされる役行者<sup>えんのかぎょうじや</sup>が鬼に仏法を説き弟子にしたという故事にもとづく、千年以上続く行事です。

荒ぶるものは、鬼だけではなくありません。奈良は国宝指定の木造建築が日本でもっとも多く集まる土地です。木造建築にとって最大の脅威は「火」。それに関わらず、奈良では、火を扱う行事が多く見られます。東大寺の修二会では、世界遺産の木造建築である二月堂で荒々しく松明を燃やします。春日大社で節分と



東大寺修二会のお松明



金峯山寺の節分会「鬼の調伏式」



念仏寺 陀々堂の鬼はしり

中元に行われる万燈籠<sup>まんとうろう</sup>では、境内約3000基の灯籠に火を灯します。夏には、万葉集にも歌われた高円山で「奈良大文字送り火」も実施されています。

近年の研究では、祭りの継続が、共同体としての防災力を育てる可能性が指摘されています。<sup>\*1</sup> 実際、毎年1月に実施される「若草山焼き」では、山全体に火が燃え広がるのを防ぐため、消防団を中心にさまざまな役割の人々がチームを組み万全の対策をしています。

大正6年（1917年）に奈良帝室博物館長に任じられた森鷗外は「夢の国 燃ゆべきもの 燃えぬ国 木の校倉の とはに立つ国」と、世界最古の木造建築を残す奈良を称えました（KeyBook1-4）。荒ぶるものを取り込み、付き合い続けていく——この地に根付く知恵は、現代社会を生きるヒントになるかもしれません。



若草山焼き

## 荒ぶる鬼を、厄除けに

鬼といえば、桃太郎に退治される悪の存在というイメージが一般的です。しかし鬼は恐るべき存在であると同時に、その力によって邪を退け、人々を守る役割も担ってきました。国学者・本居宣長は「良いものも悪いものも、並外れておそるべき存在」を、古代人はすべて「かみ」と呼んだと考えました。古代人にとって「おに」は、「かみ」に含まれる存在だったのです。日本最古級の「鬼瓦」は、平城宮跡から出土しました。東大寺でも多様な鬼瓦は見どころのひとつです。屋根から外を睨み、厄除けをする鬼瓦はまさに、「和する・荒ぶる」という両方の力をもつものの象徴なのです。



東大寺二月堂閻伽井屋の鬼瓦。

### 和する・荒ぶる KeyBook



1-1  
「日本」は、いかに成立したか？  
7世紀の国際情勢から読む。

『日本史の誕生』  
岡田英弘（著）  
ちくま文庫 2008



1-2  
多発する紛争、戦争……。  
争わず他国と関係を築く知恵とは。

『文明の衝突（上・下）』  
サミュエル・ハンチントン（著）、  
鈴木主税（翻訳）  
集英社文庫 2017



1-3  
日本人の精神世界に  
住み続ける鬼。  
その正体はいったい？

『鬼と日本人』  
小松和彦（著）  
角川ソフィア文庫 2018



1-4  
毎年、正倉院の宝物開封に  
立ち会った、鷗外が詠んだ奈良。

『鷗外「奈良五十首」を読む』  
平山城児（著）  
中公文庫 2015

Q.2

## フィルターバブルの外に出るには？



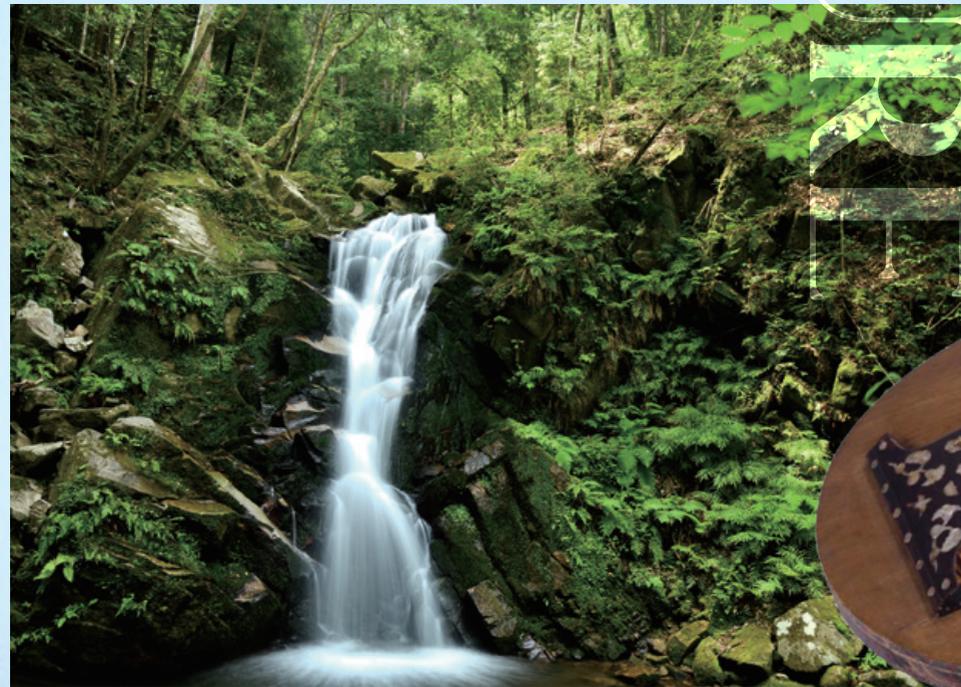
いま私たちは、かつてないほど膨大な情報に囲まれて生きています。世界では1年間に、100ゼタバイト(10<sup>23</sup>バイト)規模のデータが生み出されているともいわれます。<sup>\*2</sup> その一方で、人々はアルゴリズムが形づくる「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」の内側へと、閉じこもりつつあります。世界に向かって身を開き、他者とあらためて出会

い直すために、何ができるでしょうか。

古代の人々は、「音」への感覚を鋭く研ぎ澄ませていました。音は兆しとして、また偶然の訪れとして、人と環境を結びつけるものだったのです。いつ聞こえてくるとも知れない音に耳を澄まし、世界の声に身を委ねる。そんなひとときが、現代人にも必要なかもしれません。

## 「おとづれ」を察知して、 世界にひらく

日本には「おとづれ」という言葉があります。「音連れ」とも表され、「音が立つ」という意味をもつ言葉です。古代の人々は、ふと聞こえてきた音を、たんなる物理現象としてではなく、何かややってきた兆しだと受け止めました。木々が葉ずれの音を立てるとき、鈴が鳴るとき、そこには目に見えない神聖なものが訪れたと感じていたのです。「おとづれ」とは、世界から偶然もたらされる兆しを察知する感覚でした。



春日山原始林にある鶯の滝

# おとづれ

古代の世界は、いまよりずっと静かでした。現代では生活音や機械音でかき消されてしまいかすかな音も、古代の人々の耳には届いていたことでしょう。時間帯や季節によって変わる音も聞き分けたはずです。万葉集に「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」(志貴皇子<sup>しきのみこ</sup>)という歌があります。これについて、歌人・精神科医の斎藤茂吉は、音を立てて流れる小さな滝の音に詠み手は気づき、春の訪れを実感したのであろうと解釈しています(KeyBook2-2)。季節は、音や気配としていつの間にか訪れるものだったのです。

奈良には、古代から続く「音風景」が今も残っています。鹿の鳴き声、寺の鐘の音、朝夕に響く読経の声。また、神事・法要には雅楽の音も響きます。夏の夕刻の平城宮跡では、国内有数の「ツバメのねぐら入り」の群飛の音が空気を満たします。万葉の時代、「春風の声」と書いて「はるかぜのおと」と読ませたように、人間の声と自然の音は分け隔てなく聞かれていました。古代の人々は、「世界の声」を聴いていたのです。



奈良の鹿寄せ

哲学者の鷺田清一は、「人は、あらかじめ計画したことの外でしか、本当に他者に出会うことはできない」と語っています(KeyBook2-3)。奈良には、世界が語りかけてくる声がいまも響いています。イヤホンを外して、偶然聞こえてくる音に耳を傾けてみると、ふとしたときに、「おとづれ」はやってきます。奈良は、世界にひらかれる感覚を思い出させてくれる土地です。

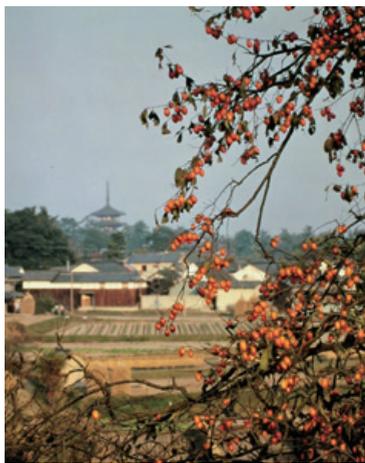


楓蘇芳染螺鈿槽琵琶 第1号(正倉院宝物)

法隆寺金堂小壁飛天復原図

## 正岡子規が触れた「おとづれ」

「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」。正岡子規が、奈良に滞在した際に詠んだ句です。子規は無類の柿好きで、東大寺近くの宿屋にて奈良特産の御所柿を所望し、喜んで食べたといひます。「くだもの」というエッセイには、こう書かれています。「柿も旨い、場所もいい。余はうっとりしているとボーンという釣鐘の音が一つ聞こえた」。子規が聞いていたのは、実は東大寺の**おおがね**の鐘の音だったともいわれています。この東大寺の鐘は「奈良太郎」と呼ばれ、いまも毎夜20時（修二会期間を除く）につかれています。子規は、ふいにやってきた「おとづれ」によって、柿を詠むというアイデアを思いつき、翌日に訪れた法隆寺のイメージと重ね合わせることで、日本俳句史上に輝く一句を編み出したのでした。



写真家・入江泰吉の「斑鳩西里柿の秋」

### おとづれ KeyBook



2-1  
古代から現代まで。日本には、どんな音が響いていたのか。

『日本の音』  
小泉文夫（著）  
平凡社ライブラリー 1994



2-2  
斎藤茂吉が選び抜いた万葉の精神を伝える400歌。

『万葉秀歌（上・下）』  
斎藤茂吉（著）  
岩波新書 1968



2-3  
現代社会が失った「待つ」こと。偶然を、待ち受けるために。

『「待つ」ということ』  
鷺田清一（著）  
角川選書 2006

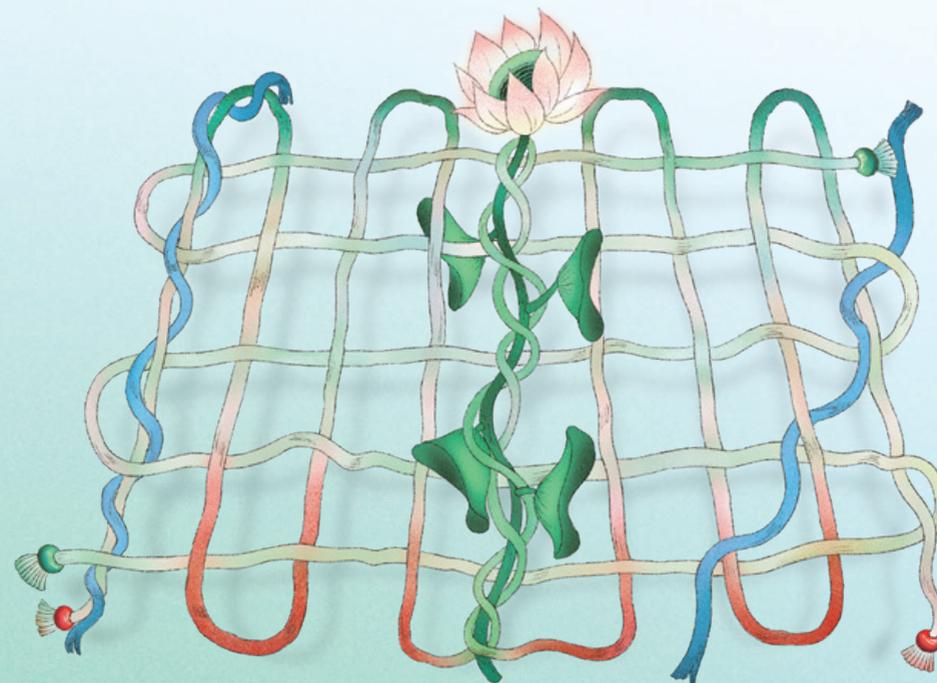


2-4  
自らが「おとづれ」することで、古寺仏像の美に目覚める。

『古寺巡礼』  
和辻哲郎（著）  
岩波文庫 1979

Q.3

## 排除でも同化でもない 共生のかたち？



世界の各地で、分断が顕在化しています。同じ国や地域のなかでも、価値観や信念の違いが表面化し、SNS はしばしば対立の場となってしまいます。互いの共通点よりも相違点に目が向き、「ともに生きる」という意識が薄れているようです。

地球全体に張り巡らされたインターネットや物流網によって、地球はひとつであり、価

値観もひとつであるという感覚が生じたのかもしれませんが、人々との異なるのは当然のことです。

奈良は古くから国際都市として栄え、多様な文化や価値観が行き交ってきた土地です。何か一つを選び取るのではなく、異なるものを重ね合わせていく。そうした古の共生の知恵に、目を向けるときなのかもしれません。

## 古代日本に生まれた 共生の知恵「ないませ」



日本は「ないませ（綯い交ぜ）」という方法で形づくられた国です。異なる色の糸を撚り合わせ、一本の美しい縄にする。それが「ないませ」の本来の意味です。

奈良は、シルクロードの終着点として、遠い大陸から宗教・文化・物資が流れ込んだ土地です。東大寺の大仏開眼供養会（752年）には孝謙天皇が行幸し、聖武太上天皇らも参列しました。導師はインド僧・菩提<sup>ぼだい</sup>僊<sup>せん</sup>那<sup>な</sup>が務め、僧侶は1万人規模。唐や高麗の楽舞も演じられ、国際色豊かな式典でした。

当時、世界有数の国際都市となった奈良では、信仰も徐々に混ざり合い、神を仏の化身としたり、寺の守護神としたりすることで仏教も神道も続いてきました。全国に約3000社あるといわれる春日神社の総本社・春日大社と、南都仏教の中心的役割を担った興福寺は、隣り合うように佇んでいます。いまも正月の1月2日には、興福寺の貫首が一山の僧侶を率いて春日大社を参詣します。作家の白洲正子は、この神仏習合の思想を「日本の神を縦糸に、仏教を横糸にして織り上げた」と書いています（KeyBook3-3）。

「せんとくん」の仲間の平成伎楽団

奈良の人々は、異なるものを取り合わせ、違いを織り込むことで、常に新たな調和を生み出してきました。そもそも「奈良」は、平らにするという意味の「ならず」から取られたという説があります。

特異な文字体系をもつ日本語も「ないませ」の一例といえるでしょう。中国から伝わった漢字を日本語体系に引き入れ、意味を借りながら読みには日本語をあてました。日本最古の歌集である万葉集では、和歌を漢字だけで記し、外来文化を編集しながら受容したのです。

奈良では、人と鹿が同じ横断歩道を渡るという、世界でも珍しい光景が見られます。異なるものを排除せず、かといって同化させるわけでもない。この精神は、現代でいう「ダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂性）」に通じる、共生の感覚とも考えられます。分断が進む現代にあって、奈良がもつ「個々の違いを残したまま関係を編み続ける力」は共生の未来を考える手がかりになりそうです。



春日神鹿舎利厨子（部分）



春日社寺曼荼羅

## 志賀直哉が生み出した「ないませ」の美

古都の文化財や豊かな自然に心惹かれた小説家・志賀直哉は、大正末期から昭和初期にかけて奈良に居を構えました。著作のなかで「兎に角、奈良は美しい所だ。自然が美しく、残っている建築も美しい。そして二つが互いに溶けあっている点<sup>てん</sup>は他に比を見ないと云つて差支へない」と、奈良の美をおおいに称えています（随筆「奈良」昭和13年）。奈良市高畑町に残る、志賀が自身で趣向を凝らして設計した邸宅は、今も私たちを変わらぬ姿で迎えてくれます。数寄屋風でありながら、西洋のアールデコ様式も取り入れた当時最先端の「ないませ」的な建築です。ここには谷崎潤一郎や武者小路実篤など、白樺派の巨匠たちが集って芸術を論じ、高畑サロンと呼ばれていました。まさに、文化的にも「ないませ」を生み出す場だったのです。



志賀直哉旧居

### ないませ KeyBook



3-1  
異文化を混ぜて築いた  
古代アジア交流史。

『越境の古代史』  
田中史生（著）  
角川ソフィア文庫 2017



3-2  
正倉院にしか残されていない  
東アジア文化1200年の輝き。

『正倉院—歴史と宝物』  
杉本一樹（著）  
吉川弘文館 2025



3-3  
白洲正子は古都奈良の美を  
どう描いたのか。

『かくれ里 愛蔵版』  
白洲正子（著）  
新潮社 2010



3-4  
ひらがな、茶道、神仏習合……。  
日本の古層にあるコンセプト。

『日本文化の核心—「ジャパン・スタイル」を読み解く』  
松岡正剛（著）  
講談社現代新書 2020

Q.4

## 大地と人間の「いい関係」？



人類の活動が地球全体に影響を及ぼす時代は「Anthropocene（人新世）」と呼ばれています。森林伐採や資源採掘、化石燃料の大量消費によって、地球環境は大きな転換点を迎つつあります。こうしたなか、人類の利益追求の手段として環境を捉えるのではなく、動植物などすべての生命に価値を見出そうとする「ディープ・エコロジー」の

思想が注目されています。

奈良は古くから、土の豊かさと美しさによって、生かされてきた土地です。その感覚は、和歌の言葉や器の造形、作物への感謝の気持ちとして、現代まで受け継がれています。いまふたたび人類が大地との関係を結び直すとき、先人たちの感性を借りることはできるでしょうか。

## 大地と人間をつなぐ 「あをによし」の精神

日本には古くから「あをによし」という枕詞があります。奈良という土地を修飾する言葉で、もとは「青丹よし」と表され、顔料や塗料に使う青い土（青丹）が採れる奈良の土壌の豊かさを祝福するものと言われています。しかし、この言葉は、平城京が繁栄するにつれて都の美しさを賛美する詞に変化していきました。平城京は、当時の東アジア最大の都・長安をモデルに建設されました。そこには、朱塗りの柱、金色の仏像、シルクロードを経て伝わったガラスの色など、鮮やかな色彩が溢れていました。人々は、大地を讃える言葉をもって、人間が生み出した人工の美を賛美するようになったのです。

万葉集にはこのような歌があります。  
「あをによし 寧樂の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」

（現代語訳：青丹が美しい奈良の都は、咲き誇る花のように、まさにいま最盛期を迎えているのだ）

万葉の人々は知っていました。都を彩る人工の美は、土から引き出されたものだ、と。



平城京天平行列



大和国〔畿内図〕

平城京大極殿や、創建期の東大寺大仏殿を輝かせる鮮やかな色も、盧舎那大仏も、奈良の土から産出された辰砂や国内外の鉱物資源を加工した顔料によるもの。「あをによし」とは、大地の恩恵と人間の知恵の融合から生まれた美を愛でる感性だったのかもしれませんが。聖武天皇は、大仏造立に際し「動植ことごとく栄えんことを欲す」（743年「大仏造立の詔」）と記し、人間だけでなくすべての生命の繁栄を願いました。

哲学者の和辻哲郎は『風土』のなかで、「人間は自然環境から分離した存在ではない」と考えました（KeyBook4-1）。大和まななどの大和野菜や、大和茶の味わいは、周囲を山に囲まれた盆地特有の寒暖差と、豊かな水や土が

生み出したものです。その土地の作物は、その土地の力を表すものに他なりません。農作物は、大地と人間の相互作用の賜物です。伝統工芸品の赤膚焼も、焼き物に適した土があってこそ。大地が人を養い、人が大地を活かす。土と人との関わり合いこそが「あをによし」の精神であり、いま、世界で求められている姿勢なのです。



赤膚焼



絹谷幸二氏が描く故郷『光ふる街奈良』。山の自然と神仏の、エネルギー循環に満ち溢れている。

## 薬草を育み人々を癒やす、奈良の土

奈良は、日本の「薬」文化をつくってきた重要な土地のひとつです。日本書紀には、推古天皇が奈良県宇陀地域で「薬猫」を行ったと記されています。薬猫とは、薬効の大きい鹿の角をとったり、薬草を摘む宮廷儀礼です。寒暖差が大きく、豊かな水のある奈良は、薬草が自生しやすい土地でした。平城京の時代以降、奈良では民衆救済のため、多くの寺院で「施薬」が行われました。その後、薬草の栽培や採取、薬の調合・製造、行商による流通までを担う「大和売薬」という産業が発展していきます。薬草の一大産地となった奈良では、江戸中期に開設された「森野旧薬園」（宇陀市）が、現在も約250種類の薬草を栽培し、薬文化の歴史をいまに伝えています。近代には、こうした大和売薬のネットワークを背景に、奈良から製薬会社の創業につながる動きもありました。



(上) 森野旧薬園・桃岳庵。(下) 森野旧薬園創始者・森野初代藤助(寛郭)が写生した『松山本草』草下23-24頁

### あをによし KeyBook



4-1  
風土は外なる自然環境ではない。人間の内なる精神構造に刻み込まれているもの。  
『風土—人間学的考察』  
和辻哲郎（著）  
岩波文庫 1979



4-2  
米国人作家は「あをによし」をどう英訳したのか？  
『万葉集 Man'yō Luster 新装版』  
リービ英雄（著・英訳）、中西進（日本語現代語訳）、井上博道（写真）、高岡一弥（AD）  
パイインターナショナル 2014



4-3  
人類の繁栄、文明の栄枯盛衰に大きく関わる「土」のヒミツ。  
『土と生命の46億年史—土と進化の謎に迫る』  
藤井一至（著）  
講談社ブルーバックス 2024



4-4  
平城京では何が食されていたのか。遺跡発掘でわかった、古代の食卓。  
『古代寺院の食を再現する—西大寺では何を食べていたのか』  
三舟隆之、馬場基（編）  
吉川弘文館 2023

Q.5

## 伝統と創造は両立できる？



新商品や新発明など、現代社会では常に「新しいもの」が注目を集めます。生成AIや3Dプリンタのような技術により、アイデアをすぐに形にできる環境も整ってきました。私たちは「新規性」に大きな価値を認めます。一方で、「古いもの」はどうでしょう。何百年の老舗や代々受け継がれてきた職人技は、後継者不足に悩まされています。伝統

を守ることに新しい価値を生み出すことは、しばしば相反するものとして語られます。しかし、かつて日本では「新」よりも、「本（本家・本流）」を重視し、新しいものを生み出す大元にある伝統にこそ敬意を払っていました。伝統をおろそかにしては、良いものは創造できない。茶道や武道が古来大切にしている思想に、その実践の知恵が潜んでいます。

## 先人と共創する イノベーションの作法「守破離」

日本には「守破離」という独自の思想があります。おもに茶道や武道などの修行において、学びのプロセスを3段階で捉える考え方です。稽古とは、まず師の教えや型を忠実に守るところから始まり(守)、型を習熟するうちにやがて自らの工夫を加えて型を破る(破)。そして最終的には、師を離れて独自の境地に到達する(離)、という捉え方です。

この思想の背景には、能を大成させた世阿弥の芸道論があるといわれています。世阿弥は、父・観阿弥とともに、奈良を

拠点として大和猿楽の一座で活動していました。世阿弥は日本最古の芸道論『風姿花伝』のなかで、観客を魅了する芸を生み出すためには、まずは師の動きをひたすらに真似ることが重要だと説いています(KeyBook5-2)。日本では、新たな価値とはゼロから生まれるものではなく、過去の蓄積を踏まえたうえで立ち上がるものだと考えられてきました。

奈良には、先人の教えを守りながらも、さらなる創造を続けるという守破離の精神があります。醤油や味噌など和食調味料のルーツである古代の醬ひしおは、平城遷都1300年

# 守破離

『能狂言絵巻』(下巻)の内「紅葉狩」

# SHU HARI



人気かき氷店「ほうせき箱」のかき氷

祭を記念して、史料をもとに忠実に再現されました。いまや、創意工夫に溢れる奈良の新名物になったかき氷は、古代貴族が好んだ甘葛あまづらという甘味料をかけた氷がルーツです。また、もともとは野外で靴代わりに履かれていた足袋は、用途や形を見直すことで現代的な足袋スニーカーとして世界へ発信されています。大宝律令の時代から作られてきた墨は置物にも姿を変え、仏教が伝来して以来人々に語りか

けてきた僧侶は「H1 法話グランプリ」のような場で宗派を超えて法話を磨き合っています。

古きに学び、新たな価値を生む——。奈良では、現役世代だけでなく、祖父母世代、さらに遠い先人たちの知恵や信仰も含めて、時間を越えた共創が行われています。人と人が時空を超えて関わり合うことが、イノベーションを生む奈良の作法です。



H1 法話グランプリ



奈良墨工房「錦光園」。伎楽面の形の「香り墨 Asuka」。

## 奈良に始まる「わび茶」という新しい美意識

遣唐使が唐から茶を日本に伝えて以来、奈良と茶の文化は、深い関わりがあります。なかでも室町時代に大和国に生まれた村田珠光は、「わび茶」の祖といわれる重要な存在です。珠光はもともと、茶を飲み分ける闘茶や、唐物を競う書院の茶など、当時の華やかな喫茶文化に接していましたが、一休宗純（一休さん）に禅を学んだことをきっかけに、茶の湯はたんなる遊芸ではなく、心を養う修行と捉えるようになります。「仏法も茶の湯の中にあり」と開眼し、簡素なものに美を見出す、新たな美意識を生み出しました。中国からもたらされた喫茶文化と、日本で発展した禅の思想を組み合わせることで、「わび茶」という日本独自の文化が大成したのです。



(上) 鎌倉～室町時代の書院空間での茶の様子。『慕帰絵(模本)』より。(下) 珠光ゆかりの茶室、称名寺「獨慮庵」。

## 守破離 KeyBook



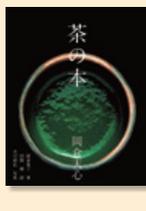
5-1  
大和猿楽は、奈良の地でいかに能を発展させたのか。  
『《物語の舞台を歩く》11. 能大和の世界』  
松岡心平(著)  
山川出版社 2011



5-2  
秘すれば花。能の世界で代々受け継がれた秘伝とは。  
『花伝書(風姿花伝)』  
世阿弥(編)、  
川瀬一馬(校注、現代語訳)  
講談社文庫 1972



5-3  
禅にも茶にも武芸にもなぜ「型」があるのか。  
『守破離の思想—初心から成就へ』  
西平直(著)  
岩波書店 2025



5-4  
茶道とは、美を見出し敬い尊ぶ儀式である。  
『茶の本—岡倉天心』  
岡倉覚三(著)、村岡博(訳)、  
大川裕弘(写真)  
パイインターナショナル 2020

Q.6

## 日本流の「想像力」とは？



言語化、エビデンス、定量データ……。現代社会では、物事を「見える化」することが求められます。数値や映像によって一目で把握できる情報が歓迎される一方、容易に可視化できない出来事や、理解に時間を要する事柄は見過ごされがちです。

ここには落とし穴もあります。文明批評家マーシャル・マクルーハンは、「視覚中心の文明においては他の感覚が衰えていく」と

警告しました。見える情報が増えた一方で、見えないものを感じ取る力は、後景に退きつつあるのかもしれない。

かつて西行は、「何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼる」と詠みました。姿も名も定かでない存在の気配に心を打たれる——見えないものを、見えなのまま受け止める。こうした感性を、私たちは取り戻すことができるでしょうか。

## 見えないものへの イメージーション「おもかげ」

日本には、今も昔も「おもかげ」を大切にしている感性があります。万葉集にも源氏物語にも記されているこの言葉は、徒然草のなかで「名を聞くよりやがて面影は推し量らるる心地する」という文章として登場します。名前を聞くだけで、何かの断片を目にしただけで、その人の姿やそのときの光景がありありと思い起こされる。そんな作用をもつものが「おもかげ」といえるでしょう。

いま目の前には「ない」ものが、あたかも「ある」ように感じられる。それはまるで、春日若宮おん祭の遷幸の儀で、人々が灯りを落とした暗闇の中、姿の見えない神霊「若宮様」が通り過ぎる気配を静かに感じ取る、その瞬間に似ているかもしれません。視覚には見えないものを、全身で感じて、脳裏で思い描く。日本の文化では、見えないものへのイメージーションを長らく大事にしてきました。

# おもかげ OMIKAGE

二上山



春日若宮おん祭

奈良は「おもかげ」の都です。寺社や古墳の近くを歩くと、時代を重ねた瓦のカケラや、土器のカケラのようなものが落ちてることがある。それを目にした瞬間、あたかもVRゴーグルをつけたかのごとく、いにしへの光景が目の前に浮かぶ。商店の壁には、現代の商品と並んで、なにげなく数百年前の絵図が飾られている。江戸時代の地図を見れば、道筋が変わっていない現代の町並みが重なって見えてくる——。若草山から昇る朝日や、春日山の原始林は、千年前の人も私たちと同じように眺めてきた景色です。

奈良を歩くことは、歴史の断片に出会うこと。断片がごく小さなものであるからこそ、私たちの想像力は大きく羽ばたき、千年の時を旅することができるのです。目にははっきりと映らなくても、心にはたしかに残るもの。日本の「おもかげ」に満ちた奈良は、見えないものを感じ取る力を、私たちのなかに静かに呼び覚ましてくれます。奈良はまさに「Old History, New Discovery.」を体感できる土地なのです。



方形三尊埴仏



高松塚古墳壁画

## 折口信夫が二上山に見た「おもかげ」

万葉集に「うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟世と我が見む」という歌があります。謀反の疑いで処刑された大津皇子を偲ぶものです。大和盆地の西端に位置する二上山は、古くから皇族の墓城が置かれ「あの世」の入口とも捉えられてきました。大津皇子が葬られたのもここです。その麓の當麻寺には、中将姫が一夜にして曼荼羅を織り上げたという伝説が伝わります。民俗学者・折口信夫は、當麻寺中之坊に滞在した際、二上山に宿る記憶や伝承に着想を得て、大津皇子と中将姫の伝説を重ね合わせた幻想的な物語『死者の書』を著しました。二上山には、史実・伝承・文学が折り重なり、いくつもの「おもかげ」が宿っているのです。



『當麻曼荼羅』真享本。當麻寺・重要文化財。

### おもかげ KeyBook



6-1  
万葉集や正倉院御物を手がかりに平城京での暮らしを甦らせる。  
『万葉びとの奈良』  
上野誠（著）  
新潮選書 2010



6-2  
歌から浮かび上がるありし日の万葉人の面影。  
『万葉集（全5巻）』  
佐竹昭広、山田英雄、工藤カ男、大谷雅夫、山崎福之（校注）  
岩波文庫 2013～15



6-3  
「面影」こそ、日本人の想像力に働きかける、文化の古層。  
『千夜千冊エディション 面影 日本』  
松岡正剛（著）  
角川ソフィア文庫 2018



6-4  
小泉八雲が惚れ込んだ失われゆく日本の精神文化。  
『新編 日本の面影』  
ラフカディオ・ハーン（著）、池田雅之（翻訳）  
角川ソフィア文庫 2000

### 収録図版 所蔵・提供元一覧

P6-8

- 金峯山寺の節分会「鬼の調伏式」 提供：金峯山寺
- 念仏寺 陀々堂の鬼はしり 提供：五條市観光協会
- 東大寺修二会のお松明 撮影：今宮康博
- 若草山焼き 提供：奈良市
- 東大寺二月堂閻伽井屋の鬼瓦 撮影：太田真三

P10-12

- 春日山原始林にある鶯の滝 提供：k-hiro / PIXTA (ピクスタ)
- 奈良の鹿寄せ 提供：奈良市観光協会
- 楓蘇芳染螺鈿槽琵琶 第1号 出典：宮内庁正倉院事務所
- 法隆寺金堂小壁飛天復原図 所蔵：奈良国立博物館
- 写真家・入江泰吉の「斑鳩西里柿の秋」 提供：奈良市

P14-16

- 横断歩道を渡る鹿 提供：narashika / Adobe Stock
- 平成伎楽団 提供：鮎内佐斗司工房
- 春日神鹿舎利厨子（部分） 所蔵：奈良国立博物館
- 春日社寺曼荼羅 所蔵：奈良国立博物館
- 志賀直哉旧居 提供：学校法人奈良学園

P18-20

- 大和国【畿内図】 所蔵：京都大学附属図書館
- 平城京天平行列 提供：平城京天平行列実行委員会
- 赤膚焼 提供：赤膚焼 大塩正人窯
- 絹谷幸二『光ふる街奈良』 提供：公益財団法人絹谷幸二美術財団
- 森野旧薬園・桃岳庵 提供：森野旧薬園
- 『松山本草』草下（部分） 出典：高橋京子（著）『森野藤助賽郭写真「松山本草」』 所蔵：森野旧薬園  
上記2枚の提供協力：高橋京子（大阪大学総合学術博物館招聘教授、森野旧薬園顧問相談役）

P22-24

- 能狂言絵巻（下巻）の内「紅葉狩」 出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/A-10185?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-10185?locale=ja))、一部をトリミングして利用 所蔵：東京国立博物館
- 「ほうせき箱」のかき氷 提供：kagiori ほうせき箱
- H1 法話グランプリ 提供：H1 法話グランプリ実行委員会
- 奈良墨工房「錦光園」。伎楽面の形の「香り墨 Asuka」 提供：奈良墨工房 錦光園
- 『慕帛絵（模本）』一部 出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/A-6866?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-6866?locale=ja)) 所蔵：東京国立博物館
- 茶室「獨盧庵」 提供：称名寺 撮影：田村昌哉

P26-28

- 二上山 提供：香芝市
- 春日若宮おん祭 提供：春日大社
- 方形三尊塼仏 所蔵：奈良国立博物館
- 高松塚古墳壁画 出典：Wikimedia Commons 原資料：文化庁・奈良文化財研究所 パブリックドメイン
- 『當麻曼荼羅』真享本 所蔵：當麻寺 提供：奈良国立博物館

\*1 参考：「祭りを通じた地域社会の担い手づくりの可能性」清水健太『ソシオサイエンス』29号（2023）早稲田大学先端社会科学研究所

\*2 出典：『SNS時代のメディアリテラシー』山脇岳志（著）ちくまQブックス 2024

奈良の歴史・文化に触れて発見したこと、考えたことをメモしてみましょう。

# Old History, New Discovery.

SNSでも奈良での「新しい発見」を  
世界につないでいます。



#oldnewnara

# NARACODE

奈良に宿る知恵を編む

発行日	2026(令和8)年3月30日
制作	株式会社編集工学研究所
企画監修	安藤昭子
構成編集	仁禮洋子
本文執筆	梅澤奈央 渡辺敬子、山本春奈 笠井安奈
資料調整	松井路代、森本研二、古谷奈々(イシス編集学校)
企画協力	佐伯亮介
アートディレクション・デザイン	mikU
イラスト	上野誠(奈良大学名誉教授、國學院大學文学部日本文学科特別専任教授) 内藤栄(大阪市立美術館館長、奈良国立博物館名誉館員)
特別協力	インタビューにご協力くださった、奈良にゆかりのある方々
取材協力	奈良市
発行	〒630-8580 奈良県奈良市二条大路南一丁目1番1号

本冊子「NARACODE」は、現代社会において広く共有されている問いや課題を入口に、奈良に息づく歴史、文化、暮らしの知恵を通じて、その背景や意味を読み解く新たな試みであり、この奈良に宿るヒント(叡智・知恵)を体系的に整理し、国内外へ確かな魅力として伝えるものです。

作成にあたっては、観光大使や学生、有識者ほか、奈良にゆかりのある方の声をもとに、特定の思想や価値観を提示するものではなく、奈良の歴史文化を一つの参照点として、読者が自ら考え、感じ取るための手がかりを示すことを目的として、奈良市から編集工学研究所に委託し、制作しました。